

## 新しい福音宣教における典礼の意義 —「行動的参加」(Participatio actuosa) の観点から—

市瀬英昭（神言修道会司祭）

### I. 第 2 バチカン公会議の教会刷新、典礼刷新の精神

(1) 源泉へ立ち戻ることと現代社会へ適応することを二大原則として教会刷新を目指した第 2 バチカン公会議（1962~65 年）から 50 年が経過した。典礼の刷新は以下のような点で遂行。

- ①イエス・キリストの過越秘義が中心
- ②会衆の「行動的参加」を促す
- ③典礼祭儀の簡素化を行う
- ④聖書の言葉を豊かに提供する
- ⑤適応と創造の工夫を凝らす、など。

刷新の目的は会衆の「行動的参加」(Participatio actuosa) を促すことにある。

そのために、①母国語による式次第の整備、②聖書の朗読箇所がこれも母国語で豊富に整備されたことなども「わかる典礼」にとって有益なものとなっている。「わかる」ことは、行動的参加のための条件であり、また、参加する人々が「変わる」ための条件と言える。「典礼は人間のためにあるのであり、人間が典礼のためにあるのではない」。この「人間のため」は、本来の人間としての在り方へと励ますもの、という意味であると思われる。われわれの成長と成熟を促し、励ますのが本来の典礼祭儀の在り方であるといわなければならない。

(2) 典礼とは、イエス・キリストの過越秘義を共同で、アナムネーシスする（想起する）祭儀であることが、教会の確信である。今回の典礼刷新、教会刷新の根本原理である、この「過越秘義」は、十字架の神秘として定義されるキリストの自己奉獻という次元と、過越、つまり死から生への移行（transitus）という次元、そして、キリストによって「すでに」完成された救いと「まだ」完成しておらずわれわれの中で働き続けている働きと緊張の次元がある。つまり、過越秘義は、キリスト自身の経験としてだけではなく、われわれ自身の在り方を本質的に規定する概念である、この自覚が重要。神からの恵みを、今ここで、「儀式と祈りを通して」受け取ることができる、という教会の信仰。この恵みを、教会は、日常生活の中で、人生の重要な節目で、受け取るようにと呼びかける。見えない神を垣間見せる原秘跡であるキリストが、「キリストにおけるいわば秘跡である」教会の中の具体的な七つの秘跡に現存し、われわれに働きかけている（『典礼憲章』7 条）。「教会は、その本性上、宣教する教会である」。同様に、「教会は、その本性上、祈る教会である」。教会のこの両面を集約的に体現するモデルは「イエス・キリスト」。

### II. 典礼祭儀への「行動的参加」について

(1) 典礼刷新のいわばキー・ワードになった「行動的参加」の用語は、教皇ピオ 10 世が 1903 年 11 月 22 日に発布した「典礼音楽」についての教令の中で初めて使用されたイタリア語からラテン語への翻訳用語である。そこでは、序文と 3 条、18 条において、①至聖なる秘義へ、②教会の公の祈りへ、③祭儀中の歌へ、の「行動的参加」ないし「参加」が勧められている。この用語は、典礼運動の

中で次第に重要なものとなっていき、第 2 バチカン公会議の典礼刷新の際には、大切な主導概念の一つとなった。典礼祭儀への「充実した、意識的な、行動的参加」が母なる教会の切なる願いである、このような参加は典礼自身の本質から要求されるものである、と言語化されている（『典礼憲章』14 条）。

以下、「感謝の祭儀」（ミサ）をモデルにして考察する。感謝の祭儀の二大構成要素である「ことばの典礼」と「感謝の典礼」の一体性については、

- ① 「ミサを構成している二つの部分、すなわちことばの典礼と感謝の典礼は、一つの礼拝行為となるように相互に固く結ばれている」（『典礼憲章』56 条）。
- ② 「神のことばを聞き、感謝の奉獻を行い、聖体を拝領することからなるミサの祭儀は、一つの礼拝行為であり……人間には完全な救いが与えられるのである」（『朗読聖書の緒言』2 版、10 項）。
- ③ 「みことばと聖体は、一方なしには他方を理解することができないほど深く結ばれています」（ベネディクト 16 世使徒的勧告『主のことば』55 項）。「二つの食卓」への行動的参加によって信者は養われる。

ところで、「行動的参加」は三つの次元で言われる。

- ① 実際の祭儀への参加
- ② キリストの祭司的働きへの参加
- ③ 神の三位一体の「いのち」への参加

ルブリカ主義と反ルブリカ主義を避け、ルブリカの背後にある信仰と神学を理解し、救いの秘義に触れるができるということこそが肝要。

（2）『啓示憲章』の発布（1965 年 11 月 18 日）から今年で 50 年。刷新前と比べると「聖書の宝庫」の解放は一目瞭然である。「ことばの典礼」において「主要な部分を構成するのは、聖書からとった朗読と、朗読の間にある歌である。説教、信仰宣言、および共同祈願すなわち信者の祈りは、それを展開し、結ぶものである」（「ローマ・ミサ典礼書の緒言」55 項）。以下、ことばの典礼の中の「答唱詩編」と「共同祈願」を取り上げ、行動的参加の実際を見る。

- ① 「答唱詩編」については、「これは、ことばの典礼にとって欠くことのできない部分……答唱詩編が神のことばの黙想を助けるからである」（「ローマ・ミサ典礼書の緒言」61 項）。朗読者のことばを噛みしめ、また、詩編先唱者の朗唱に応えて、会衆が詩編から取られた答唱部を自分たちのことばとして繰り返す、という対話的構造の中で会衆の行動的参加が実現し、役職的祭司職と共通祭司職の働きが一体となる。会衆の「聴く」という行動的参加。
- ② 「共同祈願」は、今回の典礼刷新で復興された重要な箇所。「司祭は席で立ち、手を合わせ、短い勧めのことばによって信者を共同祈願に招く……最後に司祭は手を広げ、祈りによって嘆願の祈りを結ぶ」（「ローマ・ミサ典礼書の緒言」138 項）。ここにも、キリストの唯一の祭司職に、役職的祭司職を担う司祭と共通祭司職を担う信徒とが協力して参加する祭儀であることが示されている。祈願の内容には「全世界の救いのため」がある（同 2 項）。
- ③ 役職的祭司職を担う者と共通祭司職に生きる者が社会の中で協働して生きることが全信者の課題。歴史における「救いの秘義」への参加。その意味で、われわれに「先立つてある」秘義への応答が行動的参加と呼ばれる事柄である。典礼的参加によって、キリスト者は人類の歴史における神の働きに参加する。真の典礼的参加は社会的な広がりへ進む。「一方なしに他方は理解することができないほど」である「二つの食卓」は、「第三の食卓」つまり、現実生活の中で救いを求めてい

る人々と囲む食卓とのつながりなしにはその意義を失ってしまうほどである。ここに、典礼と宣教とのつながり、典礼とキリスト者の日常生活とのつながりが浮かび上がる。パウロ 6 世の使徒的勸告『福音宣教』の指摘。ベネディクト 16 世の使徒的勸告『愛の秘跡』は、「教会生活と宣教の源泉と頂点である感謝の祭儀」（3 項）、「聖体は教会生活の源泉と頂点であるだけでなく、宣教の源泉と頂点でもあります」（84 項）と述べる。

### III. 宣教活動における「典礼祭儀」の意義

（1）2012 年に「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」のテーマで第 13 回通常総会が開催。『討議要綱』として発表され、これは、教皇フランシスコ使徒的勸告『福音の喜び』に結集した。『要綱』の表現によれば、新しい福音宣教とは「再宣教ではなく、新たな熱意と方法と表現をもって」なされる宣教（5 項）。「変化する状況にこたえるために勇気をもって新たな道を歩むこと」（同）。新しい福音宣教は「現代の人類と諸国民の必要に、時のしるしと文化の新しい状況に合わせたしかたをもって、新たにこたえること」（23 項）。その際「あかし」が重要（7 項）。新しい福音宣教の相手は、①キリストの福音にまだ出会っていない人々、②洗礼を受けており、継続的に成長すべき信者たち、③受洗はしたが、教会を離れ、もはや信じていない人々。「現代では、五大陸のすべてが宣教地です」（6 項）。宣教への「熱意」、新たな「表現」、伝える「勇気」を私たちはどこから得るのか。ここに「からだ」をもって信仰の学舎である典礼祭儀の重要性が浮かび上がる。

（2）典礼と宣教には共通点がある。

- ① キリストの過越秘義から生まれる
- ② 教会全体の行為である
- ③ 終末論的なもの
- ④ 主導権が神にある
- ⑤ 教会自体のエピファニア
- ⑥ 人間の現実にかかわっている
- ⑦ 洗礼を受けた者の権利と義務である。

テキスト理論は、①「何が」書かれているか、②「どのように」書かれているか、③読者が「どうなる」か、を考察するが、これを典礼祭儀に援用すると、何を、どのように祈るかは、信者の生き方について方向性と励ましを与えることにつながっている必要があることとなる。そうでないなら、虚しい祭儀となる。「キリスト者たちだけによって祝われるエウカリスティアは、彼らを自分自身のうちに閉じ込めることはできない……彼らはこのパンにあずかっていない人々との交わりに入る。彼らは、前にはそうでなかつた者になる。つまり、すべての人の隣人になるのである」（F. デュルウェル）。

### IV. 典礼祭儀と宣教活動への「行動的参加」

「無言の傍観者」としてではなく、祭儀に行動的に参加することを強く勧めている多くの教会公文書で、「行動的参加」は狭義の典礼祭儀に限られてはいない。東方教会では信者の生活自体が「典礼の＜後の＞典礼」と表現される。典礼祭儀の「二つの食卓」への行動的参加によって信仰が養われ、眼が開かれ、派遣の祝福を受けて、祭儀外でも、役職的祭司職と共に祭司職が協働し合いながら、「第三の食卓」へ向かう働きが「行動的参加」としての宣教活動。典礼祭儀への「行動的参加」によって信者が「ひとつ」にされることが、教会の宣教活動の基盤となる。「典礼から生まれない宣教は＜盲目＞

であり、宣教へ向かわない典礼は＜空虚＞である。「典礼によって養われない信者の日常生活は＜盲目＞であり、日常生活を照らし、励まさない典礼は＜空虚＞である」。

---

**市瀬英昭（いちせひであき）**

神言修道会司祭。南山大学短期大学部教授、日本カトリック神学院非常勤講師。1951 年、長崎県大村市生まれ。南山大学文学部卒業後、ローマ教皇庁立聖アンセルモ典礼学研究所修了。日本カトリック典礼委員会委員、『ミサ典礼書』改訂委員会副委員長。日本カトリック神学会、日本贊美歌学会会員。

[著書・論文等]

アンリ＝イレネー・ダルメ『秘義と象徴－東方典礼への招き』新世社、2002 年（訳書）

「ミサの始め－開祭の意義について」『南山短期大学紀要』33（2005 年）pp.51-74

「『あがないの秘跡』(Redemptionis Sacramentum) の受け取り方」『南山短期大学紀要』35（2007 年）pp.35-46

「アンティオキアのイグナティオスにおける殉教理解：その聖餐観へ接近するために」『南山神学』38（2015 年）pp.85-108

日本カトリック典礼委員会編『キリストの神秘を祝う－典礼暦年の靈性と信心』カトリック中央協議会、2015 年（共著）

ほか